

ベルクソンにおける意志の問題

片桐 茂博

Le Problème de la Volonté chez Bergson

Shiguéhiro KATAGUIRI

Résumé

Ce traité a pour objet d'éclaircir le problème: y a-t-il la compatibilité de l'action volontaire avec la «durée pure». Dans ce but, nous invoquons la métaphore «Paul et Pierre» dans *Essai sur les données immédiates de la conscience*. Et nous essayons de tirer avantage de l'approche philosophique et herméneutique comme du «moi superficiel» au «moi plus profond».

En conséquence de cette approche, il est évident que le «moi superficiel» fait l'expérience de la volonté du «moi plus profond» passivement comme si celui-ci serait un autre à celui-là tandis que tous les deux sont la même personne.

En fin de traité, nous constatons que la différence entre le «moi superficiel» et le «moi plus profond» est la condition nécessaire pour l'existence des textes bergsoniens et de la philosophie même de Bergson.

「自由意志を意識するという事は、選択してしまう前にそれとは別様に選択しえたと意識することを意味する」という J. S. ミルの所説 (cf. DI. 114-115/130-131)*¹ における「自由意志」は、「純粹持続 (durée pure)」としての自由というベルクソンの見地とは相容れない (cf. ibid.)。なぜなら、ベルクソンのいう「純粹持続」とは、いわば自我の唯一無二の不可逆的な変容、生成に他ならず (cf. DI. 72/80, 79/89, 83/93, 113/129, 149/172)、またそれは自我が営む不可分の行為そのものであって、いかなる瞬間においても現にあるそれ以外の在り方を可能性として云々することは意味をなさないからである。ベルクソンの見地からすれば、行為の可能性を問うことは、なされつつある行為をなされてしまって完了したものとみなす限りにおいてのみ可能なことなのである。

*1. 以下ベルクソンのテキストからの引用は、次の略号に生誕記念版 (1970年)と1939年から41年の版のページ数を並記することによって示す。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*

EC: *L'Evolution créatrice*

DS: *Les Deux sources de la morale et de la religion*

PM: *La Pensée et le mouvant*

他方、意志と呼ばれるものの構造とでもいうべきものを考えてみると、意志とは、何事かを意志する意志でしかないように思われる。すなわち意志とは志向的な構造をもつものではないか。あるいは、無目的の衝動としての意志なるものを考えることもできるかもしれないが、意志の遂行、未遂が問題となる場合は、やはり何らかの意味で「意志されているところのもの」なるものの存在を認めざるをえないのではないか。しかしそうすると、このようないわば「意志の構造」「志向性」なるものを「純粹持続」において認めることは果たして可能であろうか。というのも、「意志されているところのもの」は、それが実行された場合には、実際の行為に先だって存在したものが実現されたところのものということになるだろうし、また、「意志されているところのもの」がいつもけっして実現されないということになれば、それは、それ以外のものが実現されるところのものという消極的、相対的な存在にすぎなくなってしまい、「意志の構造」の契機としての積極的な意義を失うであろう。だとすれば、可能性の選択的意志の第一義性を否定するベルクソンにとっては、遂行の成否が問題となるような意志の存在の余地はないのであろうか。「純粹持続」においては、このような意味での意志的な契機は存在しないのだろうか。

そこで、一つの手がかりとして、『試論』（以下 DI をこのように略）におけるベルクソンがどのようなかたちで「意志」性をとらえているかみてみることにしよう。いま「意志されているところのもの」を簡略に「意志の対象」と呼ぶことにすれば、ベルクソンはこれを「実現されるべき観念の不完全な前駆的形成」(la préformation imparfaite de l'idée à réaliser) (cf. DI. 137/158 sq.) というかたちでとらえる。まず、「観念の前駆的形成」とは、その最も完全なかたちをたとえば数学における定義においてもつ。数学における定義の中には、無数の定理が前もって存在していて、それらはア・プリオリに導出可能であるように、「完全な前駆的形成」においては、未来がア・プリオリに規定され、可能性の状態で現在において既に存在する。これに対して、「純粹持続」が唯一無二の経験であるとしても、我々が何か行為を行おうとする場合、程度の差こそあれ、漠然と次に生ずるものについての観念を思い浮かべることがある。この場合、しかし、可能的なものとして現在において存在する観念が将来、ア・プリオリに結果する訳ではなく、我々は行為にうつる寸前にその観念の実現を思いとどまることができるという点が重要である。そして、この実現寸前の実現中止の可能性こそが「意志の対象」としての観念のもつ「不完全性」ということになる。

しかし、まさに、この「中止可能性」の意味こそが問題である。というのは、ある観念の実現の中止可能性が、その観念とは異なる他の観念の実現の選択可能性を意味するのだとしたら、それは「構造」的には、「選択的自由意志」の場合と全く区別がつかなくなってしまうだろうからである。

そこで、この隘路を打開するために、かつて筆者は以下のような解釈をおこなったことがあ

る。すなわち、『試論』のベルクソンによれば、「自我」は二種類あり、一方は「深層の自我」すなわち「純粹持続」であり、他方はそれから「派生して」それに「寄生して」存在する「表層的な自我」である。^{*1}そして後者においてこそ「意志の構造」は成立する。すると、問題の根本は、両者二つの自我の関係、殊に後者から前者への移行、すなわち「ベルクソンの直観」の内実にあるが、今「意志の構造」という観点からみると、どのようなことが言えるか。そこで、たとえば、ベルクソンの次のような表現を論拠に、以下のような解釈を行った。すなわち「自我が二つの相反する状態を経過するにつれて（いわゆる選択肢の「二者択一」の場合：引用者）増大し豊かになり変化するものであることに注意する必要がある。もしそうでないとすれば、どうして自我が決断するに至りうるだろうか」（DI. 116/132）。すなわち、もし「意志する自我」が絶えず変容していくのだとすれば、当然先述した「意志の対象」もまたその変容に即応して絶えず変わっていかざるをえないことになる。ベルクソンも言うように、「自我の全般的状態を変容させる一切のものはまたその意見をも変容させる」（DI. 89-90/101）からである。「意志する自我」が「意志の対象」を実現しようとして行為するとき、その「持続」としての行為そのものによって「意志する自我」自身が、そしてまたその「自我」としての「対象」そのものが変容していく。従って、「意志の対象」に即してみれば、ある瞬間に「意志の対象」であったところのもの、つまり行為に先だって予め存在していたものが行為によって実現されるということは決してありえないことになる。というのも、実際に実現されたところのものは、当の「意志の対象」そのものではないからであり、むしろ、その実現の行為そのものが「意志の対象」を自分にふさわしいように変えてしまうとさえ言えるだろうからである。この点からみれば、「持続」の来るべき瞬間に先だって観念として存在していたものが実現されるということとはありえなくなる。しかし、それならば、「意志の対象」の実現は常に挫折、失敗に終わるという宿命なのか。もしそうであれば、先述のように、「意志の構造」は積極的な意味をもたないことになるのではないか。しかし、そうではない。ある瞬間において「意志する自我」が自分の「意志の対象」を実現しようとするまさにそのことによって当の「自我」自身が変容し、従って当然またその「意志の対象」が変容し、今度は自ら変容した「自我」がこれまた変容の結果としてある新しい「意志の対象」をまさしく実現しようとして行為するからである。いわば、「意志する自我」は、自分自身と自分の「意志の対象」とを変容させようとするためにこそその「意志の対象」の実現をはかる。「意志の対象」の実現の成功、失敗を云々することは、「意志する自我」の不変性とそれに相応する「意志の対象」の不変性を前提とし

*1. 「深層の自我」はより正確には「より深層の自我 (le moi plus profond)」と呼ばれてしかるべきであるが (cf. DI. 83/93) 今後このように略称する。なお、ここで比較級が用いられていることも、後述する「表層」から「深層」へという哲学探究、テキスト記述の視点が『試論』に存在することの一つの傍証になると考えられる。

て初めて可能である。しかるに、「意志する自我」が「持続」する、すなわち変化生成するのであれば、この前提は崩れる。

すると、「実現されるべき観念の前駆的形成」の不完全性とは、一義的な決定性に対する多肢選択可能性の不確定性、不完全性を意味するのではなく、「意志の対象」としての観念が実現されることは決してあり得ない、そもそも観念自体がそれを実現する行為によって乗り越えられてしまうということの意味していることになる。しかしそうなれば、やはり「観念の前駆的形成」なるものは無意味なものになってしまうのではないかという疑問が再度生じてくる。そして、実際、単なる「持続」ならぬ「純粹持続」においてはそのことが可能なのだとベルクソン自身が示唆している。すなわち、「意識の深奥の心理学的事実の領域においては、予見することと、見ることと、行動することとの間にははっきりした区別は存在しない」(DI. 130/149)。意識の深奥の「内的な自我」すなわち「純粹持続」においては、おそらく「意志の構造」が意味を持たなくなる。ただし、現実の具体的な「自我」においては「意志の構造」が歴然と存在するといえる。そして、現実的な「自我」における「意志の構造」は、「意志の対象」の実現というかたちをとおして「自我」が「深層の自我」へと変貌するきっかけを与えているのではないかと、とおよそ以上のように考え、解釈していた。しかし、問題は依然として解決をみたとはいえない。そこで、改めて自己批判の意味をも込めて問題を提起したい。

すなわち、以上のような解釈では、しかし、「意志の構造」はあくまで「表層的な自我」におけるそれであって「深層の自我」におけるそれではない。すると依然として後者、すなわち「純粹持続」における「意志」的契機の意義は不分明なままではないか。

これに対して、直接この問題に答えるというかたちではないが、他方で、筆者は、「表層の自我」から「深層の自我」への変容を「習得」という問題場面において考察してきた*1。そこで、この観点からベルクソンにおける「意志」の問題について振り返っておきたい。まず、どうして「自我」の「人格」に関する問題に通常、知識や技能に関して云々される「習得」という語彙が関係するかというと、「人格」は「標準的な基礎行為のレパトリーを備えた人間」*2であり、「人間」は身体をベースにした何らかの「行為」を行うためにはまずその「行為能力」を習得しなければならない、ということがベルクソン哲学においても成立することを確認し、さらに「表層の自我」とは既に獲得した「能力」を選択的に発揮するだけの「在り方」であるのに対して、「表層」からの「深層」への変容とはまさに「行為能力」そのものを獲得することに他ならず、「人格」が「行為のレパトリーを備えたもの」である以上、それは「人格」の変容をも意味する、ということであった。技術などの「習得」と社会的な「行為能力」の「習得」は区別されてしかるべきであろうが、今は「能力」の「習得」という構造にだ

*1. Cf. 拙論『『習得』としての直観』東京大学文学部哲学研究室編『論集I』1982年, pp. 102-114.

*2. 黒田巨『行為と規範』勁草書房, 1992年, p.75.

け注目すると、この文脈において「持続」の有意性はどのように解されるかと言えば、「持続」において「意志」が働いているならば、それは既存の行為能力を選択的に実行にうつそうとする「意志」ではなく、新しい「能力」を「習得」しようとする「意志」ではないか、ということになる。しかし、かのソクラテスの「探究のパラドックス」と同様、「習得」すべきものの存在を知らずしてどうしてそれに対する「意志」が可能となるのか。この問題に関して筆者はかつて、ベルクソンにおいては「動的図式 (le schéma dynamique)」がこの未知なるものの認識を保証していることを示したが*1、しかし、未知なるものの「習得」を意志するということはどういうことなのか、依然として問題であろう。

そこで、ここで改めて、『試論』においてベルクソンが援用する、「哲学者ポールと行為者ピエール」の比喩 (cf. DI. 121/139sq. 以下「ポールとピエールの比喩」と略称) に着目しつつ、かつて「ベルクソンにおける他我の問題」を考察した際*2にとった、「表層の自我」が「深層の自我」へと変貌する際に何が経験されるか、という視点にたちこの問題を考察したいと思う。

まず、「ポールとピエールの比喩」とは次のようなものである。すなわち、ベルクソンは、仮にある深刻な状況下で、一見 (apparemment) 自由な判断をせざるを得ない人物をピエールと呼び、彼と同時代あるいはお望みなら数世紀以前に生きた哲学者ポールがピエールの行為に関する全条件を知っていたとして、ピエールの行った選択を確実に予言できたか、という問題を提起し、一種の「思考実験」を行うわけである。そこで、ポールがピエールの行為の全条件を知るということは、彼のその選択行為に至る「過去の閱歴の総体 (l'ensemble de son histoire passée)」を知ることには他ならないとした上で、その閱歴を構成する「心理状態」の捉え方に周知の二種を区別する。すなわち、その「心理状態」そのものを経験する動的な仕方と、その状態を記号 (symbole)、イメージ、指標 (indication) に置き換えて把握する静的な仕方である。そして後者の方法において、たとえばある感覚が他の感覚より強いとか、ある感覚を他の感覚よりも重視せねばならないとか、ある感覚が他の感覚より重要な役割を果たしているとかといった判断が可能になるとしたら、それはピエールの過去の全閱歴を知らねば不可能であるという。そこで再びある人物の過去の全閱歴の知り方が問題となるが、ポールがピエールの最終行為 (acte final) を知るということはあり得ない。なぜなら今問題となっているのは、まさに当該最終行為を「予言」することであるから。そこで残された方法は、ポールを「観察者 (spectateur)」ではなく、「演技者 (acteur)」として想定し、彼にピエールの閱歴を演技させることだけだ、ということになる。(その際、ベルクソンは、「最も凡庸な出来事 (les plus médiocres événements)」といえども全閱歴において重要性をもっているので

*1. Cf. 前掲拙論p.106.

*2. Cf. 拙論「ベルクソンにおける他我の問題」駒沢大学文学部文化学教室編『文化』第13号、1990年、pp.25-44.

心理状態のいかなる要約も不可能でありすべてその「演技」に含む必要があることに注意を促している。)すると仮にポールがそのように演技すれば、ピエールとポールは、同じ感覚を同じ順序で経験し、同じ閱歴をもち、同じように自分の身体を表象し(これは空間性によって両者を区別できないことの指摘)、「持続」において同じ場所を占めるという意味で同じ「出来事」に直面していることになり、*1 結局、両者は「一人の同一人物 (une seule et même personne)」に他ならない。換言すれば、ポールが最終行為に至るまでのピエールの全閱歴を補完(compéler)しようとして、「いかに意志そのものから発する行為を再構成しようとも、なされてしまった行為の事実がただひたすら確認されるだけなのである」(DI. 124/142)。

さて、次にもう一つの方法論的なポイントであるが、そもそも『試論』冒頭において「純粹持続」を言語によって描写することの不可能性が宣言されており、「純粹持続」そのものを分析対象として措定することには原理的な困難がある。とはいえ、ベルクソン自身、あれだけの紙数を費やして生涯にわたって自身の「持続の哲学」を説いたわけであるから、ベルクソンの自己矛盾を指摘して終わりというやり方もあるいはあるかもしれないが、言語によって表現できないものを当の言語自身によって指示する、という事態は、神秘主義その他ベルクソン以外にもみられるきわめて問題的なものでもあり、その形式的な矛盾を指摘して済むものではないと思われる。ベルクソンについてもいわばその言語行為については、テキストに即した分析が必要と思われるが、今は課題として他日を期することしかできない。そこで、分析の視点を「表層の自我」のほうから「深層の自我」へ向けたかたちで設定し、前者が後者へと変容するとき、そこにどのようなことが経験されるのか、をみることにしたい。なお、付言すると、ここでいう「表層の自我」や「深層の自我」とは何ら心理的実体を示すものではなく、いわば人間存在の「在り方」を示すものであり、前者から後者への変容こそがベルクソンが「持続」の「直観」と呼ぶものである、というのが筆者の従来よりの見解である*2。

そこで、いよいよ件の問題に迫ってみたいが、要点は、ピエールに「深層の自我」、ポールに「表層の自我」を比定し、一種の「類比」によって事態を明らかにすることにある。もちろん、一方は異なる二人の人物間の、他方は同一人物の二つの在り方という違いはある。しかし、「表層の自我」とはいわば非人称的、汎人称的な在り方であり、これに対して「深層の自我」は最も個性的な在り方である。そして、ピエールについては、「最も凡庸な出来事」を省略するような要約は不可能な「持続」が、他方、ポールについては、記号を使用する「静的」ある

*1. この箇所は、原文どおりには、《Sera-ce par la place qu'elles(les âmes de Pierre et de Paul) occupent dans la durée? Elles n'assisteraient plus alors aux mêmes événements;》「[ピエールとポールを区別するとしたら]それは、それら[両者の魂]が持続において占める場所によってであろうか。もしそうなら、それら[魂]はもはや同じ出来事には直面していないことになるだろう」(括弧による補足は引用者)となっており、ベルクソンにおける「他我」問題、個人の「持続」と「創造的進化」との関係問題に関する貴重な手がかりを示していると思われる。

*2. Cf. 前掲拙論『「習得」としての直観』

いは「量的」な対象把握の試みが強調され、「思考実験」の結果、両者の「同一性」が示されているということで、十分「類比」性が成立すると考えられるのではないか。しかし次のような反問が予想される。すなわち、なるほどポールは非人称的、汎人称的な「表層の自我」として指定できるとしても、ピエールはどうか。件の比喻においてピエールはあくまでポールとは異なる人格として考えられているのではないか。それに対して問題の「表層の自我」と「深層の自我」との関係は同一の人格におけるそれではないのか、と。これに対しては次のように答えたい。すなわち、ポールが非人称、汎人称の「表層の自我」として指定されるならば、これもまた同様に非人称、汎人称の「表層の自我」としてのピエールが自身の「深層の自我」の把握をめざすという場合も件の「思考実験」は含みうるのではないか。しかしでは、仮にそうであるとして、翻って、ある「表層の自我」による自分自身の「深層の自我」の把握と当該「表層の自我」による他の「深層の自我」の把握とはどのように区別されるのか。件の「思考実験」に関するベルクソンの記述の範囲で、この問題に十分な回答を与えることはできず、優れて「個人的」な「持続」の次元と宇宙論的規模の「創造的進化」の次元の関連づけの問題において再度取り上げ直さねばならないが、今暫定的に区別を与えるとすれば、次のようになる。すなわち、「思考実験」において示唆されるポールとピエールの「合一」の意味合いが両者のケースにおいて異なる。同一「人格」の場合は、「合一」とは「表層の自我」が「深層の自我」へと在り方を変えることに他ならず、他方、異なった「人格」同士の場合は、一方の「表層の自我」が他方の「深層の自我」の存在に直面するという事態、通常の意味での「他者」経験が意味されているということになる。

さて、以上により「類比」の正当性が保証されたとすれば、「表層の自我」が「深層の自我」に変容するとき何が経験されることになるのか。その答えは、先に引用した箇所にある。すなわち、「深層の自我」の「意志そのものから発する行為」を「表層の自我」が「再構成」しようとしても、「確認」されるのは、「なされてしまった行為の事実」だけである。ということは、あくまで「表層の自我」という在り方に止まるのであれば、「深層の自我」の「意志そのもの」は「なされてしまった」という事実性に覆われたままであるが、「表層の自我」という在り方をいささかでも踏み越える、あるいは「超越」しようとするならば、そこに「深層の自我」の「意志そのもの」の存在が経験されるのではないか。しかし、そのとき、「表層の自我」にとって「深層の自我」の「意志」はある意味で「他者」性を帯びて経験されるのではないだろうか。そして、その「他者」性こそこの「思考実験」の設定においてポールとピエールという二人の人物の異なりとしていみじくも表現されうるものではないか。それ故また、「表層の自我」のその「他者」経験は「受動的」なものとならざるをえないのではないか。なぜなら「表層の自我」によって「再構成」されうるものとは、あくまで「対象化」されたもの、逆説的ながら自分自身の「意志」ではないものであり、そうではないものとして「深層の自我」の

「意志そのもの」(の痕跡)が経験されるであろうから。換言すれば、「表層の自我」の「能動性」は、自らの「選択的意志」のそれであれ、「深層の自我」を「能動的」に「再構成」する際のそれであれ、いずれにせよ「深層の自我」の「意志そのもの」を「選択」したり、「構成」したりすることができないからである。

前述のように、筆者は先にベルクソンにおける「他我」存在を問題したことがあるが、その際指摘した論点を再度確認すると、ベルクソンにおいて「創造的進化」のレベルと個人的な「持続」のレベルとが何らかの形で結びつく、ベルクソンの表現をすれば、両者において「質的な多様性」が成立するとしたらそれは、個人的な「持続」相互の結びつき、関係において「質的な多様性」が成り立つことを前提にするのではないかということであった。そのような問題状況を踏まえると、実は、「表層の自我」にとっての「深層の自我」の「意志」の「他者」性こそ、「表層の自我」がその在り方を変える方向を示す、「他我」そして「創造的進化」の「他者」性への回路と呼べるのではないだろうか。

以上、「表層の自我」のほうから「深層の自我」のほうへと視点を向けて、「純粹持続」における有意性の問題を考察してきたわけだが、結局、仮に「純粹持続」に「意志」が存在するとしたら、それは「表層の自我」においてその「他者」性が「受動的」に経験されるうる、ということだけが示されただけなのかもしれない。すると、筆者のように「表層の自我」に止まっている自覚に終始する者にとっては、その他者性の故に「純粹持続」の「意志」の正体がはたして「創造的」な「進化」なのか、あるいは「盲目的衝動」なのか、はたまた精神分析でいう「無意識」なのか、決定しがたいようにも思われる。また、ベルクソンはそのテキストにおいて筆者の方法論的視点とはいわば逆向きの視点をとっているように思われ、彼我の間に存する「質的差異」はいかんともしがたいようにも思われる。

しかし、ベルクソンがいつの場合にも「深層」から「表層」へという姿勢で論述をすすめているわけではない。筆者はかつてベルクソンにおける「表層」から「深層」への視点が顕在化したテキストの箇所を指摘したことがある*1。

たとえば、『創造的進化』においては、予見不可能な「創造」が引き起こす「ある驚き」という表現が (cf. EC. 679/218)、また、『道徳と宗教の二源泉』においては、「持続」としての「生に対して開かれた無垢な魂」の信頼を裏切らないような「良心」は、固定的な道徳的価値基準に依存しないために、かえって社会的な「平衡感覚」を欠いているかのようであり (cf. DS. 988/10)、逆に「創造的進化」に類比的な天才的芸術作品の出現は人々の「平衡を失わしめる」といった表現がみられる (cf. DS. 1038/75)。このようにベルクソンのテキストのそこかしこに実は「表層」から「深層」へという視点は垣間見られる。その存在意義をテキストに

*1. Cf. 拙論「持続と自由行為」『哲学雑誌』第101巻第773号、有斐閣、1986年、p.234.

即して考察することは他日を期することとし、もう一つ『試論』における同趣の表現を指摘しておきたい。そこには、筆者が「表層」から「深層」への視点と呼ぶものが端的に示されている。すなわち、「もし誰かある大胆な作家が、我々の慣習的な自我の巧みに織りなされたヴェールを引き裂いて、その見かけ上の論理の下にある根本的な不条理を、単純な諸状態のこの並列の下にある幾千もの異なった印象の無限の浸透、その一つ一つに名前がつけられる瞬間には既に存在することを止めてしまった印象の浸透を我々に示すならば、我々は彼を我々自身自分で知っていると思っていた以上によく我々のことを知っているということで賞賛する」(DI.88/99)。まさに、「慣習的な自我」すなわち「表層の自我」の「見かけの論理」、「諸状態のこの並列」の下に潜む「深層の自我」、より真実の「自我」が、命名を拒む無限に多彩な印象の浸透、「根本的な不条理」として顕現するということである。そして、「基底的な自我 (le moi fondamental)」(DI.85/96)の「不条理」性とは、まさにその優れた意味での、「表層の自我」にとっての「他者性」のことではないか。

ところでしかし、先に指摘した「意志の構造」、換言すれば、意志行為成否の有意味性の問題は、以上の考察からしてどのように解決されるのだろうか。すると少なくとも、「表層の自我」が受動的に体験する「深層の自我」の「意志」の「他者性」が残すいわば刻印が「深層の自我」の「意志」の「対象」といえるのではないか。換言すれば、「表層の自我」は一体本当の自分は何を意志しているのだろうか、というかたちで「深層の自我」に問いかけることができるのではないか。いやむしろ、「表層の自我」はそのようなかたちでしか「深層の自我」の「意志」を「対象化」することはできないのではないか*1。その意味で「深層の自我」の「意志」の「対象」は、「深層の自我」ではなく、「表象の自我」にとってのみ意味をもつといえる。このように解すれば、「意志の構造」はあくまで「表層の自我」において存立するが、それは「深層の自我」の「意志」のいわば「痕跡」として「表層の自我」に与えられたものということになる。

一方で、ベルクソンは、一人の「人物 (personnage)」「人格 (personne)」における「深層」と「表層」という二つの「在り方」(cf. DI. 81/90sq.)の関係を「派生的に」*2 とか「潜在的に (en puissance)」(DI. 81/90)といったかたちで表現しているが、その関係の内実はどのようなものなのか、という問題も残る。そしてその問題は、一般に、事象を二種に弁別して、しかる後に両者を統合することにより実在全体の構造を明確にするという方法の妥当性の問題とも関連する。今これらの問題の解明に立ち入ることはできないが、しかし、我々の「自

*1. この「対象化」の機制は、ベルクソンのいう「真なるものの廻行的運動」(cf. PM. 1253/1sq.)、すなわち、「予見できない新しいものの絶えざる湧出」があたかも既存の「目的」を実現するかのような過程として把握される機制と同じである。

*2. Cf. DI. 151/173. 但し同所では、文字通りには、《projection extérieure》という表現が使われている。

我」に二つの「在り方」があるというベルクソンの指摘には、少なくとも次のような意味があると思われる。(1) 二つの「在り方」に差異があるために、ベルクソンのいう方法としての「直観」が成立しうる。より正確には、「自我」が「表層」的な「在り方」に止まらず、「深層」的な「在り方」へと変容しうるが故に「直観」は成立しうる。(2) 二つの「在り方」に差異があるために、「持続」の意義を顕揚するベルクソンのテキストが成立しうる。ベルクソンがテキストを執筆しうるのは、一方で彼が「持続」を「直観」し、他方でそれを未だ「直観」していない「読者」の存在を想定しうるからである。(3) 二つの「在り方」が統合されうるか否かは、さておき、我々がそこから探究を始めるべき原事態とは、「表層」の自我ではなく、むしろ、「表層」と「深層」との差異、我々の「在り方」が「表層」的なそれからいわばはみ出ているという事態である。繰り返していうと、この二つの「在り方」の差異は、少なくともベルクソンのいう「量的な差異」ではなく（といて「質的な差異」でもなく、両者の差異である）、「深層の自我」の「意志」が「表層の自我」によって「他者」性をおびて体験されるような差異なのである。ところで、筆者は冒頭で「持続」については、「いかなる瞬間においても現にあるそれ以外の在り方を可能性として云々することは意味をなさない」と述べたが、「自我」の在り方を二つに区別するということは、「在り方」の「可能性」を云々することにならないだろうか。すなわち、これは明らかな自己矛盾ではないだろうか。最後にこのありうべき疑問に答えておきたい。確かに、繰り返し「可能」という形式的側面についてみれば両者は同じといえる。しかし、冒頭で述べた「可能性」とは、ある「行為」の繰り返し可能性であるのに対して、「在り方」の「可能性」とは、「行為」が繰り返し可能であるような「在り方」とそうではない唯一無二の「持続」としての「在り方」という二つの「在り方」の「可能性」のことであり、明らかに両者は異なった事態について述べられている。そして、もしベルクソン哲学においては後者の意味での「可能性」をもが存立不可能とされるのであれば、ベルクソンのテキストそのものが成立しないということは先に指摘したとおりである。しかし、それにしても「表層の自我」として存在したり、「深層の自我」として存在したりするのは一体、誰あるいはどのような「存在」なのだろうか。

（*本稿は、「哲学会第38回研究発表大会」における口頭発表原稿に加筆修正したものである。発表時（1999年11月6日）貴重なご質問、ご意見を賜った方々に末尾ながら御礼を申し上げます。）